韓国の宗教と葬儀

片　茂永

はじめに

葬儀をはじめとする韓国の生活文化を考察するためには、まず宗教事情を考えなければならない。一般的に民俗とも称されるような生活文化は、実は周辺の様々な文化との融合を体現している場合が多く、なかでも特に宗教との習合が認められる生活文化については、それをただ単に民俗と言えるかどうか疑わしい場合さえある。そこには既成の宗教文化が陰に陽に息づいているからにほかならない。

現代韓国社会においても宗教と民俗との習合現象は衰えを見せておらず、葬儀も決して例外ではない。葬儀のこのような実態にもかかわらず、漠然と昔から伝えられた伝来のしきたりとして片づけたりするが、本当はシャーマニズムをはじめ儒教や道教、さらには仏教にカトリックやプロテスタントまで加わる等、多宗教習合現象が起こっているのである。したがって、宗教民俗学的な視点なしでは、日常の生活文化から醸し出される韓国の精神文化の理解はますます難しくなるのではないかといわざるをえない。

葬儀やその他の生活文化に外来文化としての成立宗教が沈殿しているという理解は、実は民俗学よりも先に宗教学の方面から指摘されていた。例えば、以下のような概念図も韓国宗教学の見解を受けつぐものとして注目に値する。

韓国精神文化の底辺にはまず巫俗が存在するという発想は、韓国の人文科学では一般論であり、その上にいつどのような外来文化が積み重なったのかについては若干の異論

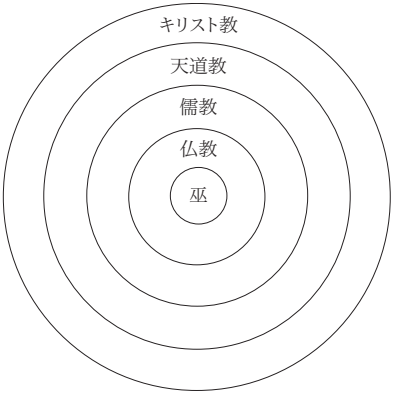

図1　韓国宗教民俗の構図

がある。ところが、図1のような構図は、宗教現象に限定した場合の概念図としてはおおむね認められている。中でも特に天道教は、韓国伝来の精神文化および外来の精神文化を網羅した多宗教複合体として出来上がった新興宗教である。したがって、論議の拡散を避けるため、本稿での記述はとりあえず控えめにさせていただきたい。

とにかく、宗教学の観点から想定可能な以上のような概念図が玉聖得によって日本に紹介されたのは、八年ほど前のことである。[1] 彼は図1について、玉ねぎ構造と名付けており、これは韓国キリスト教徒の多宗教アイデンティティ(multiple-religious identity)と、韓国の宗教文化全体における宗教混合的アイデンティティを表現したものだと説明された。キリスト教徒の玉氏が、韓国キリスト教徒の精神文化においてすら多文化状況を認めたのはとても意味深い。

ところが図1は、外来宗教と伝来の巫俗が融合したという前提での包括的観点だったので、そこに立脚した立体的な概念図としては評価されたものの、臨場感のある動的な構造には至らなかった。さらに、多文化の中でも特にキリスト教という純宗教性の抽出は可能であり、また最終的にはそうすべきだというキリスト教徒としての宗教的主観性が反映された概念図として読み取れなくもないのである。一番の外皮をなしているキリスト教の精神は非キリスト教から切り離すことが不可能でないという前提が働いていたようで、韓国のキリスト教徒にとって保たなければならないエートスこそ外側から求められたのである。

しかし、精神文化における多文化習合において、異文化一つ一つを相互分離するのはそもそも難しいと判断している私は、例えば、〝A＋B＝AB〟ではなく、時間が経過するにしたがい〝A＋B＝C〟のような新しい融合状態へと沈殿していくものとして理解している。つまり、分離可能な段階（AB）はすでに過ぎているものであって、私たちの生活世界においては第三の文化（C）として沈殿しつつ生まれ変わった形で存在しているからである。図2は、分離不可能になった沈殿状態（C）を示した概念図であっ

て、実線ではなく点線で表したのは、宗教相互間の融合が常に進んでいることを示したかったからである。すなわち、図1のような重層構造は、厳密にいえば融合状態の実態を如実に表しているとは言いがたい。

いずれにせよ、宗教民俗に対するこのような理解は、今日の韓国における葬儀を解明するにあたっても不可欠だと思っている。つまり、韓国の伝統文化について最初に思い浮かぶ私たちのイメージは、何よりも儒教であろう。特に

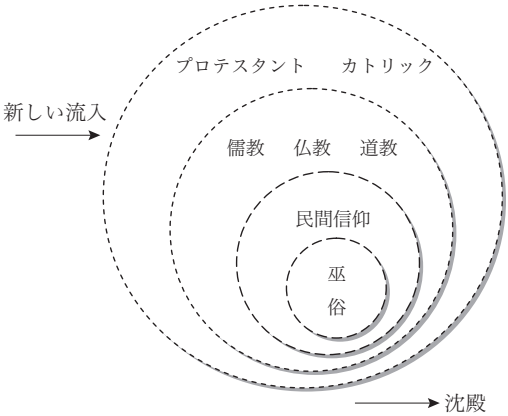

図2　沈殿の概念図

葬儀の見える部分の多くが儒教式と言っても過言ではないほどである。しかし、儀礼一つ一つが持つ象徴性についてもう少し考えてみるならば、それらの多くがシャーマニズムをはじめとする様々な民間伝承に根差しているということも否めない。

ところが、事態はこの辺でおさまるのではなく、埋葬等にまつわる風水方位や関連のしきたりに至っては道教の領域においていろいろお世話になっているのも事実であるし、死者に往生してもらうための埋葬後の儀礼を行うべく、日程等はまるで寺院の仏教儀礼を連想するかのような日取りである。四十九斎に至る一連の法要はその一例にすぎない。例えば、一七日、二七日、三七日へと続き、七七日に至るのだが、今や宗教の別を問わず、現代韓国社会においては一般的なしきたりになりつつある。

一方、現代韓国の葬儀は以上のような多文化習合に加え、さらなる異文化、つまりキリスト教にもさらされてきた。プロテスタントやカトリックが主たる内容になるが、宗派や教会ごとに異なる風変わりな慣習まで浸透しているから、どれぐらい多様な外来文化が融合されているかを予想するのはさほど難しくない。

ここで一つ問題なのは、儒教や道教が果たして宗教かどうかということであるが、これについては、人々によって営まれる宗教生活の領域に染み込んでいる文化現象は宗教

民俗の研究対象にしなければならない、という結論に到達した経緯がある。[2] 宗教学や神学ならともかく、民俗学や人類学としては神ではなく人間こそ研究の究極的な目標だからであろう。

ところで、視点はやや異なっても、結局のところはエリアーデも似通った意見を提示したことがある。つまり孔子について、孔子はもともと宗教的な指導者ではなかったものの、直接、間接的に中国の宗教に根本的な影響を与えたことを認めていたのである。道徳的・政治的改革の本当の源泉が宗教的なものであったことをその理由として挙げているが、例えば、道や天空神や祖先崇拝といった伝統的な観念を否定しなかっただけでなく、儀礼や慣習的な行動の宗教的な機能を評価していたのである。[3]

このように、成立宗教でなくても、生活世界の宗教現象に対して直接的かつ間接的な影響を及ぼしているものがあれば、それらを私たちは宗教民俗の研究対象としたのである。

以上のような韓国の宗教民俗現象に対する理解を踏まえたうえで、葬儀との関係を考えなければならない。それでは、韓国の葬儀とともに、仏教や儒教、そしてキリスト教までの習合現象について少し述べさせていただきたい。

一　仏教と葬儀

前秦から高句麗へ仏教が伝来（三七二年）してから、仏教が朝鮮半島の人々の精神世界に及ぼした一番大きな影響は、やはり善悪観念や輪廻転生思想であろう。仏教文化圏の国々と比べても大差ないだろうが、生前たくさんの善根を積んだ人は死後極楽へと救われる一方、悪行を繰り返した人は地獄に陥るに決まっていると信じられてきた。生前の業によって死後の第二の生が定まるといった民俗心意も本来は仏教的な善悪観念から発せられたと思われる。そして、極楽往生への道のりに関連しても、四十九斎に至る一連の儀礼が未だ多くの韓国人の他界観を支配していると言っても過言ではない。

ところで、仏教が韓国の葬儀に対して、特に大きな影響を与え始めたのは高麗時代（九一八～一三九二）からというのがほぼ定説である。朝鮮半島に仏教が伝えられたのは四世紀頃だが、王室仏教が民衆のあいだに広がり、なおかつ生活文化として定着するようになったのは高麗時代からという意味であろう。具体的には、臨終から脱喪までの仏教的な葬儀が王室から庶民に至るまで幅広く行われたのもこの時代だったのである。

朝鮮時代（一三九二～一九一〇）には、生活面における

規範やしきたりのほとんどが儒教式に統一されていたにもかかわらず、死者の霊をあの世へ旅立たせる方法はまだまだ仏教式の四十九斎の範疇から離れることはあまりなかった。そこで、高麗時代から現代にいたるまで行われている仏教式葬儀を、臨終儀礼・殯所儀礼・葬地儀礼・脱喪儀礼の四段階[4]に分けて説明してみたい。

まず臨終儀礼とは、最後の瞬間が近づいた患者に、遺族たちや仏教関係者が加わり、仏陀の教えに立脚して行う諸法要を意味する、と定義できよう。これには読経や念仏が含まれたりするが、この際、臨終間際の人は西向きに寝かせるのが常である。阿弥陀如来の世界である西方浄土での往生を意識した行為だとされるが、これは多分、仏教の流布している国や地域なら同様なしきたりが守られていると思われる。

高麗時代は、このような儀礼の主体が仏教寺院だったので、日本の葬儀における寺院の関わり方に似ていたと言えるかもしれない。さて、一つ注目すべきは、臨終待ちの患者を寺院に運ぶ目的は、ただひたすら死の問題に対処するがためではなく、治療への期待も兼ねていたとされる点である[5]。さらに、まだ仏教に帰依してない患者が帰依できる最後のチャンスもまさにこの短い時間だったので、医療的にも宗教的にもとても意味深い瞬間だった。このように、高麗時代の仏教寺院における延寿堂や無常堂という施設は、最後の治療をかねた現代のホスピス機能を持ち合わせていたのである。王族や貴族、そして一般の庶民に至るまで、仏教との繋がりは、死を迎えて決定的だったことがわかる。

しかし、治療不可能と判断された場合には、患者の手と阿弥陀仏の結印を五色糸で結び、念仏を唱えることによって、患者が穏やかに死を迎えるようにしていたので、これも仏教文化圏と共有する仏教葬送儀礼の一つと言えよう[6]。言うまでもなく、阿弥陀浄土まで無事に導かれたいという一念の表れにほかならない。したがって、韓国の寺で近来運営されている看病部という施設も[7]、決して新しい風俗ではなく、高麗時代からの宗教的かつ医療的な伝統を受け継ぐ歴史文化遺産と考えなければならない。

高麗時代の墓から発掘された墓誌銘を集大成した『訳注高麗墓誌銘集成』によれば[8]、どれほどたくさんの人々が仏教的な死を志向したのかがよくわかる。高僧たちの〝座脱入亡〟は当時の人々にとって理想的な死に方の一つだったらしく、最後まで一点の乱れもないような死に方を遂げた人のことは特記されるほどだった。臨終が近づいてから頭髪を剃って仏教に帰依した人の中には、死亡一日前に比丘尼になったある女性の法名も見える。またある老人は、沐浴斎戒をし、妙蓮寺の住職に直接頭髪を剃ってもらい、目真という法名をもらっている。ある人は、合掌したまま阿

弥陀仏を念じつつ静かに息を引き取ったとされるなど、座脱入亡への宗教的願望も並ならぬものがあったようだ。

右記の『集成』によれば、仏教式の臨終は寺院に限らず、庶民の家々でも死者の発生とともに念仏や読経は欠かさなかった。朝鮮時代の儒教社会ですら、仏教式「薦度斎」は家の葬式で守られる場合が多かった。家から離れた場所での死を不浄視する儒教観念が広がるにつれて、朝鮮時代における寺での葬式が減少はしたものの、仏教式法要の一定部分はずっと残っていたことは注目に値する。

次は殯所での儀礼になるが、殯所とは遺体が安置された儀礼空間のことで、ここに僧侶が招かれて、亡者の極楽往生のための薦度斎を行うことになる。ところで、殯所を設ける場所であるが、仏教伝来当初から寺や在家信者の場合は家が多かった。しかし今の現代社会では、病院付設の葬儀場での葬儀が多くなったので、遺体の安置場所と位牌を置く場所が異なるケースも増えている。遺体の安置には、腐敗防止のための施設が不可欠になった反面、弔問客を迎えるためにはそれにふさわしい空間が別途必要になったのが一番大きな原因だろう。

いずれにしても、僧侶による簡単な説法や念仏は常例であって、特にインド伝来の葬儀が伝えられる『無常経』は一つの指南書のようなものだったらしい[9]。遺体を釈迦牟尼の涅槃の姿勢で寝かせるとか、真言が唱えられる中、聖水や黄土をもって清める法要等が記録されている。清めまでの儀式を終えた遺体は、火葬場に移され荼毘に付されることになるが、遺骨は石塔の中に納めるか、または埋蔵をしたといわれる。しかし、現代の韓国社会においては、一部の高僧の死を除いては、荼毘後の納骨が圧倒的に多く、あとは埋葬の順で行われている。納骨のための納骨堂が寺の境内に建てられる傾向にある現実からすれば、どこか日本の葬式仏教に近づいている感じがしなくもないが、荼毘後の埋葬地は以前の埋め墓に比べれば、狭い空間にはなっているものの、昔の面影を少しは残していると言えよう。

崇儒抑仏政策で知られる朝鮮時代の法要集成『作法亀鑑』[10]によれば、削髪、沐浴、洗水、洗足、着裙、着衣、着冠、正座、施食、表白、入龕の順で仏教葬儀が行われていたようだ。ところで、一つひとつに対する仏教的な意味が与えられてはいるが、全体的には死者が無事に彼岸に辿りつくためのきめ細かな準備と深く関わっている。つまり、浄土への安全な引導と理解して差し支えないだろう。

いずれにせよ、死者が発生して間もないうちに設けられるはずの殯所の場所だが、時代によって、家から寺へ、また家へと戻り、現代では病院となったのが現状である。つまり、病院の葬儀場（正確には、葬礼式場）は今や伝統と諸外来宗教が入り混じった多宗教空間と化している。そして、今日の問題として浮上するのが、仏教葬儀についての

専門知識を持った人が病院の葬儀場には少ないということで、近年は信者会の中で仏教葬儀互助会が結成されるか、または仏教葬儀専門会社にパッケージで委託する家庭が増えている。

一方、韓国仏教界には仏教文化圏の他の国々と同様に火葬が原則として受け入れられてきた。これは、釈迦牟尼の火葬に因んでの仏教の教えでもあるからであろう。それで火葬が仏教葬儀としては当たり前ではあったが、古来より伝えられた葬法としては土葬が圧倒的に多かった。つまり、火葬は仏教的な文化現象だったのである。しかし、火葬が僧侶や在家信徒に限定されてはいたものの、仏教伝来当初から現代韓国社会に至るまで延々と伝えられてきたのも事実である。したがって、韓国仏教の浮沈と火葬が互いに連動するような歴史的展開についても最近注目の眼が向けられている。

ところが、ここで一つ気になるのは、高麗時代から広がったといわれる火葬が、実は火葬後の埋葬が大半だったことである。火葬後の散骨ではなく、最終的には遺骨の埋葬にこだわったのだが、その理由は、儒教の孝思想の他にも、当時すでに伝えられていた道教による風水思想の影響があったと思われる。つまり、祖先崇拝思想と風水地理思想の習合がまずあって、そこに仏教の火葬が積み重なるような形で多文化習合が発生したのであろう。昔の墓や、そこに残された骨壺からそのような多文化の痕跡が読み取れるのは、とても注目に値する。

ところで、崇儒抑仏の朝鮮時代になってからは、特に火葬が不孝への代名詞となったことがある。火葬は、儒学者たちによって聖典視されていた『朱子家礼』の理念に反するのは言うまでもなく、仏教勢力に対する攻撃の口実を与えたりもした。『朱子家礼』によれば、親の魂の寄り所である死骸を燃やす行為は、すなわち人倫と天理を裏切る行為とされた。火葬をやめる代わりに、儒教式の土葬を勧める国からの御言葉が津々浦々に届くようにもなった。したがって、朝鮮時代を通して行われた火葬は、実は寺院の境内に限られる宗教現象だったのである。

しかし、朝鮮時代が幕を閉じ、日本による統治時代（一九一九〜一九四五）になってからは、再び火葬が勧められるようになったが、それは朝鮮総督府の介入によるものだった。合併以前から、朝鮮半島各地で居留民団を形成していた日本人は、死者が発生すると特に火葬施設がなかったので、ソウル中心を流れる漢江の川辺で火葬を行ったと伝えられている。[11] ソウル市麻浦区に建てられることを想定した大規模な火葬専門の葬儀場設計等が整えられたという記事が当時の新聞に載ったのは、一九一〇年八月二九日の合併からまもない当年九月六日のことだった。[12] 朝鮮総督府が火葬場のことをどれほど急務として考えていたのかがよ

くわかる。

その後、葬儀に限らず、朝鮮の伝統文化に対する全般的な整理作業の一環として行われた冠婚葬祭の調査を踏まえ、「墓地火葬場埋葬及火葬取締規則」というものを総督府令で頒布するに至った[13]。一三九二年朝鮮王朝開国以来の埋葬が、火葬とともに取締りや指導の対象となったわけだが、火葬が数百年ぶりに再び復活する兆しが見え始めた契機でもあった。しかし、当時の朝鮮社会はまだまだ儒教的な孝の理念と土葬を不可分の関係に考える人が多数を占めていたので、総督府令が十分理解されたとは言えず、総督府の文化政策が人々から歓迎されない原因の一つでもあった。

火葬か土葬かをめぐる両者の葛藤が絶えない中、いきなり解放を迎えてからは、とりあえず朝鮮時代伝来の土葬に戻るようになった。が、これも束の間、一九八〇年代から再び増え始めた火葬が、現在では多数を占める局面を迎えている。まさに、火葬か土葬かをめぐる論争は、仏教伝来当初の古代社会から現代まで続く、思想論争のような一面さえ見せていると言っても過言ではない。

死骸の処理までの一連の儀礼が済んだら、いよいよ服喪から脱するための儀礼、つまり脱喪儀礼を行わなければならない。さて、ここで注意しなければならないのは、脱喪は儒教からの言葉であるが、その概念は決して儒教の専有物ではないということだろう。死者の魂が無事に彼岸にまで辿りつくのを見届けることこそ、脱喪の主な目的である。そのための仏教側の最も重要な儀礼は四十九斎にほかならない。

四十九日間が意味するのは、この期間こそ仏教でいう「中有」だからであり、四十九日以降、亡者は次なる生を営むとされることこそ、遺族たちの関心の的であろう。そのため、遺族は薦度斎を一生懸命に行うことによって、亡者が極楽往生することを祈る。在家信者なら寺で数回にわたる薦度斎を行うことになるが、近年は、仏教信者でなくても墓や家で四十九斎を意識した何らかの儀礼を行う人が多い。韓国の現代社会において、四十九斎こそ宗教の壁を越えて、幅広く行われる死者の薦度斎だと主張する研究もあるが[14]、多宗教社会での韓国人の普遍性は他界観を探るうえで極めて重要な問題であることは間違いない。

二　儒教と葬儀

儒教が朝鮮半島に伝えられたのは三国時代（高句麗・百済・新羅による鼎立時代）といわれるが、社会的規範（儒学）と宗教（儒教）の両面において定着するようになったのは、朝鮮王朝に入ってからというのが定説である。朱憙（一一三〇～一二〇〇）の『家礼』が高麗時代にすでに伝

わってはいたが、国の法律的かつ宗教的イデオロギーとして発展したのは朝鮮時代からといわれる。これによって、仏教式から儒教式へと様変わりしたわけだが、『経国大典』（一四六九）や『国朝五礼儀』（一四七四）等が国によって編纂される等、国家主導による儒教社会化は急速に進められた。[15]

したがって、朝鮮時代の儒教式葬儀は国家理念と深く結びついていて、仏教寺院や一部の僻地を除いては、大半の人々が従わなければならなかった。現在の韓国社会ですら、班家の後裔たちはその伝統を守り続けている場合があって、メディアの取材対象になったり、または地域活性化のための観光資源に活用されたりしている。つまり、現代韓国社会の感覚からみれば、朝鮮時代風の儒教式葬儀は珍しがられるぐらいの疎遠な文化なのである。

このような理解の下に、儒教式葬儀とはそもそもどういうしきたりだったのかを考える必要がある。まず、死者の発生前から「卒哭」までのことを初終葬礼というが、これから迎える本格的な葬儀のための遺族たちの役割分担が主な内容となっている。「訃音」という死亡通知もこの段階でやらなければならない。息を引き取ったことが確認されれば、哭をし、招魂を行う。招魂とは、もちろん死者の魂を呼び戻す行為にほかならない。死者が生前に着ていた服を持って屋根の上に登り、左手は襟の部分、右手は服の腰のところを取って、北に向って死者の名前を三回呼ぶ。この際、遺族の皆は哭を止め静かに見守らなければならない。招魂に使われた服は再び死者に被せるのだが、それは死者を蘇らせようとする最後の努力であろう。

死亡が確認できた段階からは、「護喪」という人がすべての葬儀を司ることになるが、だいたい喪主の友達が護喪の任に当てられた。要するに、そこからは護喪の指示に従って、遺体を屏風や帳を立てて隠したり、枕席を用意したり、または線香や蝋燭を灯したりしなければならない。また香典関連の準備をさせ、死者と血の近い順に喪主を立たせる。女性は髪を下ろして、喪家の遺族であることを表し、棺を作らせる。杉か柏木がよく使われたらしい。それから訃音の知らせも急ぐことになるが、家の入口には「死者飯」も用意させる。一連の準備が整ったら、いよいよ弔問客を迎える段階である。

ところが、初終段階だけでも煩雑でややこしい葬礼が多かったことから、遺族たちの苦労に加え、現代社会の諸事情からすれば、非現実的だとか非合理的だという声が増えるようになった。初終を第一段階として、あと一八段階も残っているので、死者が発生する度に、遺族はいうまでもなく、村の出費や疲労は大変だったと思われる。各段階別の名前だけ挙れば、第二段階から、襲、小殮、大殮、成服、弔、聞喪、治葬、遷柩、発靷（出棺）、及墓、反哭、

虞祭、卒哭、祔祭、小祥、大祥、禫祭、吉祭で終結である。一つひとつの用語説明は控えめにしたいと思うが、仏教葬儀と同じく、現代の韓国社会では葬儀専門会社や葬儀互助会の専門家に任せるか、または息を引き取った病院付設の葬儀担当部署に一任するケースがほとんどである。

このような変化にもかかわらず、いまだ儒教式と言える部分があるとしたら、それは一九段階から派生した若干の用語や行為、または葬儀後の命日祭祀ぐらいではないだろうか。仏教式の四十九斎を含め、毎年行われる命日祭祀こそ、まだまだ韓国は儒教社会だと考えさせてくれる根強い表象となっている。

いずれにせよ、今頃の韓国社会では、昔風な儒教式葬儀を見るのはなかなか難しく、例えば慶尚北道安東市河回村や、その他、民俗保存地区のような数か所の伝統村にしか残っていない。なかでも河回村は世界遺産に指定されている村でもあって、そのような昔の儒教式葬儀がよく残っている。いわゆる伝統文化の保護対象になっているのである。

三　キリスト教と葬儀

㈠　カトリックと葬儀

カトリックが朝鮮に伝えられたのは一八～一九世紀頃で、それ以降、着実に信者数を増やしてきた。ところが、アジアの他の国々と同様に、伝道の過程には迫害を伴っていて、一番大きな葛藤の要因は祖先崇拝の問題だった。祖先崇拝を偶像崇拝とみなすカトリックの内部でも、土着文化と融合するような方向で伝道をするか、偶像崇拝は一切認めないかで議論が分かれていたとされる。このようなカトリック内部の議論は、朝鮮だけでなく、中国や日本でも起こっていたと伝えられている。

様々な紆余曲折の末、韓国カトリックは土着信仰との融合を模索するような形で発展してきたので、現在の韓国カトリックは、仏教ほどではないが韓国の伝統文化をかなりの部分受け入れている。特にカトリック葬儀についても、カトリックの教理からかけ離れた行為でない限りでは、伝来の慣習や儀式と並行することも可能とされている。[16] このような柔軟な姿勢は、決して現代になってからの発想転換ではなく、一九世紀に木版本で刊行された『天主聖教礼規』（一八六四）に端を発しているらしい。当時の朝鮮への伝教を成功させるために、ローマカトリックの教皇庁が苦慮の末下した結論だったのであろう。

以上のような伝教過程を踏まえ、現代韓国社会に至っては、さらなる習合を呈するような公認があった。つまり、カトリック葬儀は臨終や死亡、慰霊祈祷、殮襲、入棺、葬礼、虞祭等によって構成されているが、このうち、殮襲や

虞祭は儒教式でありながらカトリック界も受け入れたのである。[17] ただし、これは韓国カトリック教会議が公認した部分であって、実際にはその他にもカトリック信者のあいだで幅広く受け入れられているものがある。それが四十九斎だ。四十九斎はまさに今の韓国人にとっては普遍文化と言っても言い過ぎではないほどであろう。

まず、カトリック葬儀の詳細を臨終段階から垣間見ることにしたい。

カトリックでは人の死を「善終」と呼ぶが、カトリック伝来当初の朝鮮時代から使われている言葉であって、もともとは「善生福終」を意味するとされる。[18] つまり、善なる生を営み、福なる死を迎えたと判断して、まずは死者の枕元に小祭台を設け、十字苦像[19]・聖燭・聖水を供えておく。それから、聖堂に連絡をし、煉霊会[20]か善終奉仕会の協力を要請するとともに、葬礼ミサや場所、入棺時期等の打合せをする。

死亡が確認できたら、人々は皆で祈祷と聖書奉読をし、引き続き『旧約聖書』の詩篇（psalms, psalmi）一二九章五〇章の奉誦等を行う。その後、韓国カトリックでは慰霊祈祷である「煉祷」を行うようだが、煉獄が仏教の中有のような世界であるなら、煉祷はその四十九斎に似ている。儀礼内容は異なっても、死者が最終的に渡っていくべき彼岸に移動する前に、一時的にとどまる中間世界が設けられるなど、両宗教における救済方法や願望には隔たりをあまり感じないのは興味深い。

それから行われる殮襲のような儀礼は、韓国の他の葬儀と同様に儒教の影響を受けているので、儒カ習合と言えるような内容も見られている。ただ、殮襲や入棺の途中、祈祷や詩篇奉誦、聖水を掛けたりするのはカトリック葬儀にしか見られない光景だろう。さらに、韓国の伝統的な葬儀では遺体に白装束の寿衣を着せるのが昔からのしきたりであったが、韓国カトリックもそういう伝統文化に柔軟に対応している節がある。

出棺と葬礼ミサのあいだにも祈祷や詩篇奉誦はつきものであって、終わったら柩は聖堂に運ばれる。ここからは、告別ミサが行われることになるが、死者と生者とが別れる儀式のことである。しかし、とりあえずは別れても、キリストの世界では一つだといわれているので、いずれは再会できると彼らは信じている。告別式と簡単に言い切れない所以である。

聖堂での告別ミサは、沈黙の祈祷からはじめ、聖水掛け、線香、告別の歌の順で進み、一段落したら火葬場へ運ぶか、土葬の場合はそのまま墓地へ向かうことになる。土葬には下棺礼等の簡単な儀式を伴うわけだが、ここまで終わったら一応カトリック葬儀は終了ということになる。

以上のようなカトリック葬儀にとって一番大事なのは、

やはり復活信仰であろう。死者の魂はイエスキリストの犠牲によって救われると信じられており、なおかつ、死とは復活に向かっての新しい旅だと考えられる。儒教式では、死者の魂は、祖先祭祀によって周期的に招魂再生することが前提とされるが、カトリックの一回きりの復活は、それを否定する。

さて、仏教葬儀の四十九斎が七日斎を七回実施するように、カトリック信者が死亡した場合にも、すぐ天国へ行くのではなく、煉獄に一定期間滞在すると信じられているので、葬儀後三日目や七日目、または三〇日目に煉ミサを行うのは大変注目に値する。韓国のカトリック界でも、このような葬儀は他の国のカトリックでは見られない現象として理解しており、仏教とカトリックとの習合現象はますます広がりを見せている。

㈡ プロテスタントと葬儀

一九世紀初め頃から、欧米人宣教師らによって朝鮮半島に伝えられたプロテスタントは、一九世紀後半になってからは朝鮮人自らの宣教活動が行われるほどの定着ぶりをみせていた。その後、政治的な紆余曲折はあったにせよ、新時代の先鋒に立つなど、他の宗教とともに近代化への道を歩みだした。現在では、一千万以上の信者数を擁する主要な宗教の一つにまで成長しているので、プロテスタントと韓国文化との相互関係はいまや仏教並の大きな問題となっている。

葬儀においても、当然ながら新教なりのしきたりや禁忌があるので、今までの韓国伝来の葬儀風景とはだいぶ趣が異なる。家族構成員全員がプロテスタント信者ならともかく、家族の一部の構成員だけが信者の場合は、親の死亡を機に遺族ら同士で葬儀の方法を巡る争いが起こったりするのも珍しくはない。韓国社会においては、だれもが積極的に触れようとはしない厄介な問題である。

信者の誰かが臨終間近になると、牧師のような聖職者が家に迎え入れられることからプロテスタント葬儀は始まる。臨終礼拝のためであるが、亡者の魂は天使と悪魔とが競い合って連れ去ろうとするからということと、天国への願望を叶えさせたいからだといわれる。[21] しかし、神ではない死霊への祈祷行為に対して、韓国プロテスタントの内部でも賛否両論あるらしい。伝来の民間信仰との習合の疑いが持たれるからであって、教理と土着信仰とは常に緊張関係に置かれている。

死亡が確認できたら、昔ながらの儒教葬儀のように、亡魂が抜け出せないように遺体を縛っておくのだが、これは欧米キリスト教では考えられない光景である。カトリックがそうであったように、韓国における儒教とプロテスタント、そして民間信仰は相互に習合しつつ土着化過程にある

と言えよう。ただ、訃報においては、「召天されました」のような文言を使うことによって、天国のイエスキリストに呼び戻されたことを暗に表現したり、弔問客は一般的な「冥福をお祈りします」の代わりに、「復活をお祈りします」という言葉を口にすることによって、クリスチャンの葬儀であることを強く表明する。

入棺のときはまた入棺礼拝を行うが、祈祷、聖書奉読、説教、讃美歌、信仰告白、祈祷、入棺、讃美歌、主の祈祷の式順で進められる。さて、入棺のための殮襲についても儒教の用語がそのまま使われたり、葬儀専門の業者が関わったりもするので、欧米クリスチャンから見れば、どうも不思議なプロテスタント葬儀であるに違いない。

出棺を意味する発靷礼拝の段階であるが、葬礼礼拝ともいわれる。主礼は牧師が司り、開式辞、黙祷、讃美歌（二二一章）、祈祷（牧師）、聖書奉読（ヒブリ書）、略歴報告（主礼）、説教、祈祷（牧師）、挨拶、讃美歌（五四五章）、祝祷（牧師）、出棺（運柩委員）のような順になっている。[22]

さて以上は、プロテスタント葬儀に関してある程度充実した例であって、最近は専門葬儀場の都合によって、略式化や他宗教葬儀との普遍化が進んでいるといわれる。韓国の多宗教状況が現代社会の世俗化の前でさらなる文化変容を経験しているのである。

墓地に着いたら下棺礼拝を行う。火葬の場合は、もちろん火葬場を経由するだろうが、そのあと散骨よりは納骨堂に向かうか、土葬の場合はそのまま墓地に向かうかであろう。ところで、火葬をすれば復活できないのではないかと心配する信者もいるなど、牧師としてはその説明に大変苦労するといわれる。クリスチャンと言いながらも、信者たちの心意の中には、先祖のお骨と魂とがまだまだ不可分の関係にあるらしい。

下棺礼拝の例をみると、開式辞、黙祷、讃美歌（一八八章）、祈祷（長老）、聖書奉読、宣告（主礼者により、土から来た体を再び土に戻すと宣言する）、取土（棺に土をかける）、祈祷（主礼者）、讃美歌（二二八章）、祝祷（主礼者）のような順となっている。[23]棺に土をかける順であるが、まず喪主から始めて、娘、嫁、その他の親族や弔問客になる。その他の作業は大体村人の担当となるが、これはプロテスタントに限らず、韓国社会なら一般的なしきたりであるので、宗教色を以てはなかなか説明できない。しかし、墓石における〝聖徒○○〟という墓碑銘だけは、故人がクリスチャンだったことを力強く主張しているようにみえる。

結び

葬儀をはじめとする韓国の様々な民俗文化は、実は外来の諸宗教との融合のなか度重なる文化変容を余儀なくされ

てきた。これは、現代の韓国社会や文化を見るうえで避けては通れない前提であると同時に、本稿の立脚点でもある。仏教伝来当初から現代に至るまでのあらすじを俯瞰することしかできなかったが、各時代における宗教ごとの浮沈とともに、それに連動して葬儀がどのように変わってきたのかを垣間見たつもりである。近年の葬儀では、このような多宗教色とともに、葬儀専門会社による式典型の葬儀も加わるなど、その変化は著しい。いずれにせよ、宗教と葬儀との関連はおおむね次の通りであった。

最初に仏教との関連であるが、伝来当初は王室や貴族を中心とした外来文化だったので、自然に仏教式火葬も上層階級に限られる文化だった。高麗時代になってからは仏教が庶民のあいだに幅広く浸透していたので、それに伴い火葬も広がりを見せたが、朝鮮王朝時代に入ってからは状況が一変し、祖先崇拝のキーワードは孝と土葬であって、火葬が立ち入るような隙間はあまり見受けられない時代だった。しかし、その背後には、儒教が形式主義に走った向きもあり、死後の問題、つまり彼岸の不安を解消してくれたのは相変わらず仏教だった。これこそ外見は儒教式葬儀でありながら、死後の問題に対応するための四十九斎等が今に残る大きな理由だったのである。

西方浄土での往生願望こそ仏教式葬儀が絶えない原因だったが、もっと積極的な天国への救済はカトリックやプロテスタントの伝来を待たなければならなかった。輪廻思想を背景とする仏教の極楽往生が生前の功徳によるものなら、贖罪による天国か地獄かがとてもリアルに突きつけられる局面での葬儀が、近代以降、韓国の葬儀文化にさらに溶け込み始めたのは注目に値する大変化だった。この変化は、葬儀に止まらず、家庭や地域の構成員同士、または社会全体の精神的な統合のうえでも深刻な負担になる恐れがあり、それが試されようとしている。

葬儀にはやはり土着の要素も残ってはいるが、仏教や儒教、さらにカトリックやプロテスタントのような欧米文化が加勢したことが、韓国の葬儀が一層複雑になった要因である。そして現今の葬儀は、多文化社会としての現代韓国の縮図のようなものであって、そこに沈殿しているはずの多宗教状況を一つひとつ繙くことは、現代韓国の素顔を読み解くうえでもますますその重要性を増していると言えよう。

注

〈1〉 愛知大学国際問題研究所が主催した講演会で発表された。玉聖得「東アジア三国のキリスト教成長の比較と展望」（二〇〇六年七月二三日）。

〈2〉 片茂永「宗教民俗의 研究方法과 範囲」『宗教와 一生

儀礼』民俗苑、二〇〇六年、四四－四九頁。
〈3〉ミルチア・エリアーデ「古代中国の宗教」『世界宗教史』三、筑摩書房、二〇一二年、三八頁。
〈4〉具美来『韓国仏教의 一生儀礼』民俗苑、二〇一二年、二三六頁。
〈5〉同右書、二五五頁。
〈6〉宝光『喪葬例를 通한 布教의 活性化』（大韓仏教曽渓宗教育院本末寺住持세미나教育内容）二〇〇四年。
〈7〉朴慶庸「寺刹民間医療伝承様相」『韓国学論集』四一（啓明大学校韓国学研究院）、二〇一〇年、三三九頁。
〈8〉金用善『訳注高麗墓誌銘集成』翰林大学校出版部、二〇一二年。
〈9〉張淳用訳『大蔵一覧集』東国訳経院、二〇〇六年、四五二頁。
〈10〉白坡亘璇『作法亀鑑』二〇一〇年。
〈11〉朴泰虎『葬礼의 歴史』西海文集、二〇〇六年、一七七頁。
〈12〉『皇城新聞』一九一〇年九月六日。
〈13〉朝鮮総督府中枢院『朝鮮祭祀相続法論序説』国学資料院、一九八〇年、三二八頁。
〈14〉具美来『韓国人의 죽음과 四十九斎』民俗苑、二〇〇九年。
〈15〉金時徳「儒教式喪葬礼文化」片茂永ほか『宗教와 一生儀礼』民俗苑、二〇〇六年、九一－九二頁。
〈16〉서울大教区典礼委員会編『聖教礼規』가톨릭出版社、一九九〇年。
〈17〉韓国天主教主教会議編『喪葬礼式』가톨릭出版社、二〇〇三年。
〈18〉金栄珠「韓国가톨릭의 一生儀礼研究」片茂永ほか前掲書、一九六頁。
〈19〉十字架で処刑されたイエスの苦難を象った形象。
〈20〉まず、煉獄（purgatory）とは、カトリックの教理からすれば、死者の魂が生前に犯した罪を清め、天国へ行くため一時的に留まると信じられる場所であり、煉霊とはそこに辿りついた死者のことであろう（『斗山百科事典』http://terms.naver.com/search.nhn?query）。
〈21〉李福揆「韓国開新教一生儀礼와 伝統一生儀礼의 相関性」片茂永ほか前掲書、二二二頁。
〈22〉同右論文、二二九頁。
〈23〉同右論文、二三一頁。

参考文献（出版年順）

서울大教区典礼委員会編『聖教礼規』가톨릭出版社、一九九〇年
韓国天主教主教会議編『喪葬礼式』가톨릭出版社、二〇〇三年
朴泰虎『葬礼의 歴史』西海文集、二〇〇六年
片茂永他『宗教와 一生儀礼』民俗苑、二〇〇六年
張淳用訳『大蔵一覧集』東国大学校訳経院、二〇〇六年

具美来『韓国人의 죽음과 四十九斎』民俗苑、二〇〇九年
朴慶庸「寺刹民間医療伝承様相」『韓国学論集』四一（啓明大学校韓国学研究院）二〇一〇年
具美来『韓国仏教의 一生儀礼』民俗苑、二〇一二年
金用善『訳注高麗墓地名集成』翰林大学校出版部、二〇一二年
ミルチア・エリアーデ「古代中国の宗教」『世界宗教史』三、筑摩書房、二〇一二年